SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

「朝鮮近代文学選集」の刊行と李泰俊『思想の月夜』：音訳・二重言語・母語性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010045

「朝鮮近代文学選集」の刊行と李泰俊『思想の月夜』
――音訳・二重言語・母語性――

南　　富　　鎭

一　「朝鮮近代文学選集」の刊行

熊木勉訳・李泰俊『思想の月夜』(二〇一六年八月）は、朝鮮近代文学選集刊行委員会（大村益夫、熊木勉、白川春子、白川豊、芹川哲世、波田野節子、藤石貴代、布袋敏博、山田佳子）による「朝鮮近代文学選集」の第七巻である。

波田野節子訳・李光洙『無情』が企画第一冊目として刊行されたのが、二〇〇五年一一月で、ほぼ十一年にかけて第七巻までの刊行に至っている。この十一年の期間をどう感じるかは個人差があると思うのだが、日本で朝鮮文学に多少でもかかわっている人間からすると、ここまでたどり着いたこと自体が奇跡のようにも思われる。企画がスタートした頃は、すでに歴史用語化した観のある「韓流ブーム」の名残が残っていた時期だったが、その間、東アジアの政治情勢は一変し、日韓関係も大きく揺れ動いた。これに並行し、近代学問の基盤沈下と文学研究の崩壊は急速に進み、その煽りを受けて出版業界は不振を極め、本企画もそのうち、うやむやになるだろうと思った。正直、ここまで続くとは思わなかった。高度情報通信化が異様なスピードで進む昨今、日本人がわざわざ朝鮮文学を、いや、そもそも文学書を読む理由も必要性もないと思っていたからである。第六巻が刊行されてからしばらく消息がなかったので、すっかり忘れていたところ、第七巻が届いたので、内心少なからず驚いた。まずは、第七巻までたどり着いた経過を紹介する。

第Ⅰ期全四巻

第一巻　李光洙『無情』二〇〇五年一一月、波田野節子訳

第二巻　姜敬愛『人間問題』二〇〇六年五月　大村益夫訳

第三巻　短編小説集『小説家仇甫氏の一日』二〇〇六年九月、熊木勉、白川春子、白川豊、芹川哲世、波田野節子、布袋敏博、山田佳子訳

第四巻　蔡萬植『太平天下』二〇〇九年三月、布袋敏博、熊木勉訳
第Ⅱ期全四巻
第五巻　金東仁『金東仁作品集』二〇一一年一一月、波田野節子訳
第六巻　廉想渉『三代』二〇一二年一一月、白川豊訳
第七巻　李泰俊『思想の月夜』二〇一六年八月、熊木勉訳

二年、三年のブランクを経ながら刊行されてきたが、今度の第七巻はほぼ四年に近いブランクがある。息も絶え絶えの状態で、ここまでたどり着いたのだろうか。

朝鮮文学研究の礎を築いた陶南趙潤済博士は、朝鮮文学の精神性を「連綿とした粘り強さ」(은근과 끈기) と規定したが、この刊行の過程をみると、まさにその言葉がぴったり当てはまる。朝鮮文学を専門とする日本人研究者からその精神の継承を見るのは、なにかアイロニーのような感じもするのだが、外国文学研究は本来そのようなものかもしれない。

しかし、朝鮮近代文学選集刊行委員会が当初企画した「朝鮮近代文学選集」の刊行がこれで結実したのではない。道半ばなのである。以前にも紹介したことがあるが、当初の企画からすると、まだ以下のようなものを残している。

第Ⅱ期全四巻
洪命熹『林巨正』＊未刊
第Ⅲ期全五巻
李箕永『故郷』＊未刊
金南天『大河』＊未刊
韓雪夜『塔』＊未刊
朝鮮短編選集＊未刊
朝鮮詩選集＊未刊

第Ⅱ期第全四巻となる予定の洪命熹『林巨正』は刊行されておらず、第Ⅲ期全五巻を含めると、計六冊ほどを残している。ようやく半分を超えている状態で、従来のペースからすれば、「日暮れて途遠し」の状態であろう。あと何年を要するのだろうか。はたして最後まで刊行されるのだろうか。

韓国・朝鮮文学の翻訳史において、これほど纏まった分量を、しかも長編を中心に、綿密な意図と方針によって翻訳企画されたのは前例がない。ましてや

平凡社という日本を代表する出版社からの刊行である。

たしかに戦時期に翻訳ブームらしきものがあったが、それは断片的で、作家と作品は一部に偏り、しかも政治的意図さえ濃厚なものであった。企画性はなく、総量的にも遥かに少ない。朝鮮近代文学選集刊行委員会による本企画はまさに歴史上稀有のもので、おそらく空前絶後、前無後絶の作業といえよう。日本でこうした企画が可能になったのは、ひとえに朝鮮文学者・翻訳者の充実と研究の蓄積に因る。しかし、こうした条件は当然の産物ではなく、歴史的偶然によるものであると、筆者には思える。たまたま、これを企画し、研究的に支えるような有能な朝鮮文学研究者が、珍しくもこの時期に、偶然にも一か所に揃ったからである。それを纏める中心的な存在が大村益夫先生で、母体の産室となったのが早稲田大学であろう。今後、このような一流研究者が一堂に揃うことはおそらくないであろう。当たり前だが、このような企画も生まれないだろう。その点、本企画と本事業は歴史的な意義さえ持っているようにも思われるのだが、歴史が往々そうであるように、基本的には偶然の産物でもある。もちろん平凡社の持続的な支援が得られる偶然性がもっとも重要なのかもしれない。

今後も紆余曲折が予想されるが、艱難辛苦のなか、本企画がいずれ完結に至ることを願うばかりである。

熊木勉訳『思想の月夜』

朝鮮近代文学選集

二　熊木勉訳・李泰俊『思想の月夜』

熊木勉訳・李泰俊『思想の月夜』は、表題の長編小説「思想の月夜」に、短編小説「鉄路」「故郷」「桜は植えたが」「福徳房」「夕陽」で構成され、巻末に充

実した「解説」がついている。

まず注目されるのは巻末の訳者による「解説」である。これは本書に限るのではなく、既刊六冊にも共通して収録されている。筆者は、翻訳には詳しい解説など不要とも思っているが、「朝鮮近代文学選集」の「解説」は見逃さず読んでいる。「朝鮮近代文学選集」の大きな特徴が巻末の「解説」の充実にあり、「解説」は作家や作品の大きな見取図となり、またそれ自体が優れた研究論文にもなっているからである。貴重な写真資料もふんだんに使われ、一般読者向けの全体像を示しながらも、高度な研究論文のエキスが盛り込まれている。これは朝鮮近代文学選集刊行委員会メンバー個々の優れた研究業績に裏付けられたものであろう。また当初からそのような目的でスタートしたのであろう。

熊木勉氏の「解説」も従前の例に漏れず、極めて充実したもので、筆者も翻訳文を読みながら、何度も「解説」を読み直して参照した。朝鮮文学は個人の変遷史、家族史、時代史への理解を要するところが多くあり、作家個人の変遷史と同時代史が切り離せないところがある。近代における個人と民族の激しい変動がもたらした現象であろう。文学一般的な普遍性より、朝鮮という特殊性が前面に強く出ている。それは強烈な臭気に近い。ちょうど並行して、北海道の釧路・根室に拘泥する桜木紫乃氏の一連の作品を読みながら、ジェイムス・ジョイス『ダブリンの人々』を再読しているが、どこかで植民地期朝鮮と相通じる臭気を感じる。アイルランドとダブリンの歴史と風土を抜きにして『ダブリンの人々』の理解は困難であろうし、釧路・根室の歴史と風土への共感なしには桜木紫乃氏の文学的な挑戦が理解できないだろう。そこには独自の近代国家ではない周辺性の哀しみが常に漂う。

熊木勉氏は早稲田で何度かお会いしているが、その都度、名前と風貌がこれほど一致する人はそうはいないだろうという印象を受ける。熊と勉の字がよく似合うと思うのだが、今回の翻訳書を読みながらもそうした印象を強くした。注釈の丁寧さと細かさ、すなわち一語一語に対し、気が遠くなるような調べ方をしているのが伝わってくるからである。これでは時間がかかるだろうと思いながら、氏の翻訳文と注釈を通して初めて気づく事柄が多く、大いに勉強になった。おそらく『思想の月夜』の翻訳には相当てこずったであろう。綴り方の不統一に加え、方言や地名・人名、風習や風俗、歴史的事項などに膨大な調査の時間を要したであろう。

長編小説「思想の月夜」は、李泰俊自身の過去史を年代史的に書いたもので、張赫宙『孤独なる魂』(1942) や『遍歴の調書』(1954) などに近い性質の作品で

ある。筆者はこうした類の作品を朝鮮思想伝統の「身世打令（シンセタリョン）」や「恨み払い（ハンプリ）」に淵源を求めているが、内容がこうした伝統的な個人史で構成されている分、翻訳には難解さを伴う。訳者はこうした個人史の特殊性に多くの苦労を強いられたと推測される。筆者はいまだ朝鮮語原作を読んでいないが、おそらく原作では理解できないはずの多くの事柄が訳され、翻訳自体が近代朝鮮史、朝鮮生活史、風俗史、地方史の重要な参考資料にもなるだろうと思った。ネイティブが読み落とし、理解できない多くの事柄が日本語で明瞭に訳され、作品自体が生まれ変わり、風貌を一新しているような印象を受けた。不思議に思い、ちょうど手元にある雑誌『国民文学』に掲載されているハングル短編「夕陽」(1942・２）を探し出し、原典と熊木訳文を逐語対照してみたが、やはり氏の翻訳を通して意味が分かった箇所や言葉が少なからずあった。おそらく名訳として残るだろうが、少し気になるところもあった。これは熊木勉氏の翻訳に限る問題ではなく、「朝鮮近代文学選集」全体にかかわる問題かもしれない。名前の「音訳」のことである。

三　名前の「音訳」について

朝鮮語のハングル名前に漢字を当てることで発生するのが「音訳」である。熊木氏の訳注によると、「ハングルのみで示された人名には含意を念頭におきつつ音によって漢字を当てた」と注記され、この名前の「音訳」が「朝鮮近代文学選集」の統一した方針であったことが分かった。日本語を母語とする訳者たちが朝鮮語の語感で、ハングル名前に対応する漢字を連想して当てることは容易いことではない。もちろん朝鮮語母語話者さえ容易なことではなく、漢字・漢文教育の廃れた今日となっては、おそらく日本人訳者以上にそのような感覚が無くなっているだろう。戦後教育を受けた筆者の漢字語感もその部類に入るが、それを前提したうえで、いくつか気になる名前の音訳を取り上げる。断っておくが、これはあくまでも主観的な感覚の問題で、訳者の音訳のほうに妥当性がある可能性は十二分にある。

筆者にとってやや気になる音訳は、短編「鉄路」の「哲洙」、短編「故郷」の「金允建」、「朴哲」、短編「福徳房」の「朴喜老」、長編「思想の月夜」の「潤洙」「恩珠」などである。このうち、「福徳房」の「朴喜老」は鄭人澤訳『福徳房』を参照した可能性があり、「思想の月夜」の「潤洙」は「音訳」という訳注がないため、原典に従った可能性もあり、ここでは言及しない。

まず、短編「鉄路」の「哲洙」だが、この名前は無学の漁師の名前としては

あまり相応しくない。古くから人名のテツ（철）は「喆」「鉄」がよく使われ、「哲」の使用は珍しいケースで、近代知識人の親が好みそうな漢字である。「哲学」という言葉の影響である。したがって、「喆守」「鉄守」がより相応しい。短編「故郷」の「金允建」も「金潤建」がより自然な気がする。「允」は五行の部首を含まないため、「建」と組み合わせて使うケースは少ない。「朴哲」も「朴喆」「朴鉄」が想定される。「朴哲」は朝鮮人の実名というより、大正期プロ文学の主人公にありそうな小説的名前である。「哲」は五行の部首を含んでないので人名としてあまり使われない（戦後には流行っているが）。ちなみに、短編「福徳房」の「朴喜老」老人は「朴熹老」の可能性があり、長編「思想の月夜」の「恩珠」の場合は「銀珠」が似合うような気がする。古典的な女性の名前には「銀」が好まれている。「恩」は漢字使用が廃れた戦後に使用が増えた印象が筆者にはある。「潤洙」は、「允洙」か「閏洙」「潤守」のように、水偏（サンズイ）の漢字が一個少ないほうがよいと思われるが、主人公の李松彬同様、もしかすると作者自身による作為的な作名かもしれない（原典を確認していないので）。「李松彬」という名前は、韓国人の名前としては珍しく、木偏が四つも入っている。基本的には朝鮮の作名習慣に反する。筆者の感覚なら「李頌彬」（姉は「李頌玉」になるか）になるはずだが、「李松彬」とは作者の思い入れが作り出した架空の名前であろう。「夕陽」の女主人公の「陀玉」という珍しい名前は、訳文では注釈が付されていないが、おそらく赤鷺（トキ）の朝鮮語からの漢字音写であろう。

ここで、今後の翻訳に参考になればと思い、朝鮮の作名法の基本を少し紹介していく。

とくに男子の場合、作名は基本的に五行思想に則って作られる。五行の相生関係を利用し、それを表す文字（意味を含む漢字）を名前の部首に組み込む。そのため、五行部首の重複、混乱をもたらす複数の五行部首の使用を嫌う。相克する部首を使うことはタブーで、基本的にはありえない。もちろん日本のように親の文字を継ぐこともない。簡単な五行相生と五行相克の図を紹介する。

（http://wiki.mbalib.com/wiki/%E4%BA%94%E8%A1%8C%E7%AE%A1%E7%90%8 参照）

たとえば、筆者の家系でいえば、筆者の「鎭」（金）は一族同世代の「回し字」

(돌림자) で、親の代は「孝」(土)、その上が「兆」(火)、その上が植 (木)、筆者の下の世代が洙 (水) と決まっており、この五つの文字を反復して使う。相生の循環的な反復である。五行部首 (それを含む漢字) の重複を避けるのは親の世代や下の世代との混乱を防ぐ目的もある。もちろん基本的には縁起が悪いからである。朝鮮文学を読み、音訳を行う時にはこうした作名習慣を覚えておいたほうがよい。それに習慣上、名前に好む漢字とそうでない漢字がある。

やや気になって少し調べてみると、面白い「音訳」がいくつかある。ごく一部を紹介するが、金東仁の短編「ようやく目覚めるころ」(第五巻) の「金牌」(금패) は、当人が歌を得意にする妓生であるから「錦唄」(サンズイに貝の字も当てられる) が似合う。妓生の名前は「錦」がよく使われる。義妹の名の「금주」も「錦珠」が似合う。どうも「金牌」は日本の遊女のあだ名のような印象が筆者にはあるが、妓生であるからやや侮蔑的な金牌 (あるいは「金珠」) が相応しいという感覚もありうる。もちろん訳者である波田野節子氏の感覚を尊重したい。付言しておくが、金東仁全集のハングル原典「ようやく目覚めるころ」を読んだとき、意味不明のところがあまりにも多く、筆者はしばしば波田野氏の日本語訳を参照した。

蔡萬植の長編小説「太平天下」(布袋敏博訳、第四巻) の「尹慶孫」は「尹炯孫」を当てたくもなるが、それ以外の多くの音訳はおおよそ違和感がない。布袋氏の音訳のおかげで偶然に発見したのだが、「太平天下」の家系の名前 (作名) が滅茶苦茶になっていることだった。尹家の五代にわたる名前は、①尹容圭 (奎がより多いか) ⇒②尹斗燮⇒③尹昌植⇒④鍾秀⇒⑤慶孫 (炯がより自然だが、すでに部首が火の燮が使われている) と続くが、土⇒火⇒木⇒金⇒火 (炯？) となる系譜は作名習慣を無視したもので、現実的にはあり得ない。作者の故意によるのか、あるいは不注意による単純なミスなのかは判別できないが、作名の無秩序は作品内容を反映するかもしれない。家系に水偏 (サンズイ) が使われておらず、尹慶孫 (もしくは尹炯孫) となるのは、家系の混乱と断絶を暗に示している可能性がある。あるいは一つの時代の終焉を象徴する可能性もあるだろう。漢字音訳を通して初めてこのような実態が発見される。

ハングルの「音訳」は登場人物の性格を決めるきわめて重要な要素で、さまざまな蓋然性の上に成り立つ。もちろん訳者の感性と感覚が優先される。「朝鮮近代文学選集」が人名カタカナ表記を採用せず、あえて音訳を採用したのは正しい選択であったと筆者は思っている。現今流行っているカタカナの人名からは、人物像が全く伝わらず、筆者には、どうも別の国の人間のような気がする。

難しい課題ではあるが、音訳が可能な人名については音訳を採用すべきであろう。それは訳者の専権でありながらも、責任の所在でもある。

四　「二重言語」の問題

李泰俊の作品が纏まった一冊として日本語訳されたのは、本書が最初ではない。朝鮮文学者では珍しく、朝鮮芸術賞第二回受賞者作品集として戦前に、鄭人澤訳『福徳房』(1941）が単行本として刊行されている。ちなみに朝鮮芸術賞第一回受賞者は李光洙で、長編『愛』(前編・後編)、短編集『嘉実』、長編『有情』(上・下）がモダン日本社から、鄭人澤訳『福徳房』とともに、「朝鮮文学傑作選」として翻訳・刊行されている。

鄭人澤訳『福徳房』は、短編15編が収録され、李泰俊の代表的な短編をほぼ網羅している。熊木勉訳『思想の月夜』は表題の長編に加え、短編５編が翻訳されているが、そのうちの２編「桜は植えたが」「福徳房」は鄭人澤訳と重複している。重複訳を避けようと意図したようにも思えるが、代表作２編に限ってはどうしても外せなかったのであろう。

鄭人澤訳『福徳房』を読めば誰もが気づくだろうが、鄭はおそらく植民地期における最高の日本語駆使者であったと言ってよい。植民地期を代表する日本語作家であった張赫宙、金史良を凌駕する日本語力をもち、李泰俊や李光洙の日本語力とは雲泥の差がある。李泰俊は変則的な教育経歴や短い留学生活から、おそらく日本語に多くの不自由があったと推測される。『国民文学』1942年２月号にハングル作品「夕陽」を発表したのも思想的な問題というより日本語力の不備によるものであろう。時代的要請から相当無理をして書いたと思われる日本語創作「第一号船の挿話」(『国民総力』1941年９月）での日本語表現は稚拙で、とても日本語で安定的に文章を書けるようなレベルではない。致し方なく書いたであろう。そこからイデオロギーを詮索するのは無意味である。

李泰俊の文学と思想を考える時には、李のこうした日本語力を理解する必要がある。それは李泰俊に限られることではない。植民地期の朝鮮人作家研究には作家個々の日本語力がどの程度であったかを把握しておくのは重要である。日本語力の優劣によって作家の思想と行動が左右されている傾向が窺われるからである。

たとえば、李箱の東京生活の破綻は李箱の稚拙な文章日本語力（金鍾漢の詩と比べれば一目瞭然である）に負うところがあり、李泰俊の浅い日本体験と脆弱な日本語力は、李の文学活動（朝鮮語美文）や思想（根強い班常（バンサン）の身分差別

意識）と深く関係している。尹東柱の朝鮮語への孤独な沈殿と穿鑿、成熟と喪失を拒む純粋な幼児性への回帰は、尹の日本語力とも少なからず連動していると思われる。近代の暴力性による心的傷痕（トラウマ）から精神的退行に癒しを求めている。おそらく尹東柱は教育経歴からすると、生活日本語においてもやや不自由したであろう。植民地期教育を正規に受けた朝鮮半島出身の留学生（普通学科⇒高等普通学科⇒中学校⇒日本留学）よりも遥かに不備な日本語力で、日本社会で言語的に一層孤立したことが想像される。

しかし、従来の研究者は、作家個々の日本語力の落差に気づかず、植民地期に生まれ、植民地期教育を少しでも受けて、あるいは日本にちょっとでも留学していれば、「二重言語」のように、日本語を自由に不便なく駆使できたと勘違いをする。そうした前提のうえ、日本語表現を個人的意思で敢えて選択「した／しなかった」といったような思想的イデオロギーを抽出する。これは言語を知らない深刻な誤解である。こうした誤解から、近年一部の植民期文学研究者の間で、植民地期朝鮮人の日本語を「二重言語」として捉え、定義し、安易に学術用語として使う傾向が見られる。英語の翻訳語に由来する概念だろうが、植民地期にこれを当てはめるのは、使用者自身が日韓の言語をよく理解しておらず、おそらく時代を観念的・イデオロギー的に捉えているのだろう。

そもそも「二重言語」とは朝鮮人日本語作家には該当せず、「二重言語」が駆使できるような朝鮮人日本語作家はほとんど存在しなかったと言ってよい。幼児期からの生活基盤（文化性）における強固な母語（朝鮮語）の干渉により、朝鮮人の日本語表現は植民地期を通してつねに不安定な状態に置かれていた。学校教育課程で行われる日本語教育の程度ではとても「二重言語」の話者にはなれない。日本滞在や留学でも大概が朝鮮生活の延長に過ぎず（朝鮮生活以上に日本語から孤立していた）、実質的な効果は少なかった。留学と言っても経歴の飾りに過ぎないケースがほとんどである。それは今も昔も同じである。ほぼ例外に近いのが、金鍾漢の日本語であるが、彼は留学生というより、日本の婦人雑誌の記者だったからであろう。要するに、「二重言語」のハードルは極めて高いのである。「母語」の文化性は基本的に「二重言語」を許さず、「二重言語」が成立するためには「母語」を一度解体しなければならないからである。それは成長した人間が再び幼児に戻るほど難しい。

引例として多少適切さを欠くが、今日の印度人やフィリピン人一般の英語力を想定すればよいかもしれない。また敢えて失礼な譬えをすれば、本書企画の朝鮮近代文学選集刊行委員会の優れた日本人訳者達でさえ、誰一人「二重言語」

の所持者とまではいえないのと同じ程度に、植民地期朝鮮人作家は「二重言語」の所持者ではない。おそらく本企画の日本人訳者達（もしくは外国文学者一般）は、長年の自己努力の経験上で、母語の根強さをよく知っているだろうと思っている。さらに私見だが、筆者は25年ほど日本に在住しているが、いまだに「二重言語」と呼べるような日本語と朝鮮語を駆使する韓国人（韓国語母語話者）に遇ったことがない。「二重言語」と呼び得るような韓国語を駆使する日本人（日本語母語話者）にも会っていない。母語はそれほど根強く存在する。いくら「日本語を強要し／日本語を強要され」たとしても母語性の再獲得は難しいのである。同じように、「朝鮮語（母語）を奪う／朝鮮語（母語）を奪われる」こともほぼ不可能に近い。個人にとって母語とは今も昔もそのようなものである。同様の状況は、朝鮮語を母語とする戦前の朝鮮人日本語作家にも当てはまる。彼らは一概に言語的特殊能力を持つ人間ではないのである。彼らの日本語表現への苦心と葛藤と躊躇がそこに存在する。

たとえば張赫宙は、厖大の量の日本語作品を書いたが、張の日本語は不安定で、その状態は最後まで続く（張は自己の日本語を「特殊の文章」と呼ぶ）。不思議な現象だが、張の日本語は戦後になって一層酷く乱れていき（「黒い真昼」「黒い地帯」「ガン病棟」など）、最晩年には英語で小説を書いてもいるが、その原因は張の内部で日本語と朝鮮語が混乱し、いずれの言語も安定しなかったからではないかと思われる。朝鮮・朝鮮人を描く日本語は学習したが、日本・日本人を描く日本語を、張はもとより獲得していなかったのである。同じ日本語でも、小説において二つの世界は、全く別の日本語力を要求する。戦後、張の日本語が酷く乱れ、作品は振るわず、英語で第三国（印度）を描こうと試みたのは、張自身の日本語表現が限界に直面したからであろう。張ほどではないが、東京帝大大学院出で、植民地期にほぼ最高のエリート教育（日本語教育）を受けた金史良においてさえ、日本語の苦戦が感じられる。朝鮮・朝鮮人は精緻に描かれているが、作品舞台が日本であるにも関わらず、金史良の日本語作には日本と日本人が十分に描けていないのである。

朝鮮人日本語作家の日本語表現に安定性が見られるのは、おおむね戦後の金達寿以降になる。金達寿が「在日文学」の嚆矢と呼ばれる所以は、日本語表現に多少の違和感が見られるものの、それはおおむね在日の文化性に起因するもので、基本的には金の日本語が持つ強靭な安定性による。日本語で朝鮮と日本を描き分ける力である。それは幼児期からの日本生活と膨大な読書経験、絶え間ない金自身の勉学と生活（記者と作家）によるものであろう。

金の日本語文体の粘り強さは定評があり、よく志賀直哉や伊藤整の影響が指摘されているが、筆者は全く違うものであると思っている。むしろその対極にいる。志賀直哉の文体云々は当時の文学青年の決まり文句に過ぎない。金の日本語文体は明らかに講談社（大日本雄辯會講談社）発行の人気雑誌「少年倶楽部」「キング」「成功」などの文体を受け継いでいる。漢字の少なさ、平仮名の多用、口語体の冗長さ、飾らない表現、平凡さと分かりやすさの追及、小説と身辺雑記の混在などは、講談社の雑誌「少年倶楽部」「キング」などの文体にそっくりなのである。総じて粘っこい。ひたすら伝達を重視する。金の少年時代の読書経験と思想（立身出世）が作り出した文体であろう。こうした諸々の特徴から金の日本語文体は、近代日本人文壇作家の影響とは無縁のもので、近代日本の知的構造からも独立していると思っている。「少年倶楽部」と「キング」が作り出した作家である。金が韓国・朝鮮、日本、在日の世界を描き分けることができたのは、金自身がこうした平板で飾らない粘っこい文体を自ら作り上げたことによる。正式な教育課程で修得した端正な日本語ではなく、日本の文壇作家から影響を受けた純化された知的日本語でもない。文体があたかも自作題名の「雑草」(1942) のようである。こうした日本語獲得の代価として、当初は持っていたはずの朝鮮語の母語性はほぼ機能しなくなったであろう。

金達寿の日本語は、張赫宙や金史良のような植民地期日本語文学者と戦後のいわゆる「在日文学」者との境界線上に存在していたと思われるが、それでも朝鮮語での創作は極めて難しい状態だったであろう。しかし、金達寿の描く朝鮮は日本語世界に吸収・同化・埋没されず、見事なバランスの中、生き生きとしている。これは極めて珍しい現象である。張赫宙の日本語には朝鮮語の世界がそのまま透けて見えている。金聖珉もそうである。生の朝鮮がそのまま日本語に置き換えられているに過ぎない。朝鮮が日本語の表現論理に馴らされず、加工されず、生（なま）の状態で存在する。これは張や金が最後まで母語（朝鮮語）の縛りから逃れられなかったことを意味する。金史良もどちらかというと、張により近いと思っている。朝鮮語がなお母語性を強く発揮している。張赫宙や金史良が朝鮮・朝鮮人を、あるいは在日朝鮮人をリアルに描くことができたのは、この朝鮮語の母語性による。同じ理由で、日本と日本人をリアルに描くことができない。植民地期日本語作家の言語的限界である。それは台湾人日本語作家にも当てはまる。一方で、その逆の理由（朝鮮語母語性の揺らぎ）で、金達寿は日本・日本人を描くことができたのである。「朝鮮人日本語文学」ではなく、「在日文学」たる所以である。

一方で、金達寿以降の在日文学者らはすでに日本語を母語にしている。もちろん、小説が書けるような朝鮮語は最初から有していない。日本語が母語となった分、日本社会を描く日本語は知的で優麗になったが、作品においては、朝鮮と日本が十分に描き分けられていない。朝鮮が日本語母語の世界に完全に吸収・同化・埋没され、日本的な政治・思想イデオロギーで梱包されている観念的な朝鮮が造り上げられているのである。たとえ別の政治イデオロギー的な理由からハングル創作を試みたとしても、結果は同じである。そこにもはや生の朝鮮はない。一般に「在日文学」と呼ばれる性質のものとなる。自己アイデンティティと政治イデオロギーへの拘泥である。文学の観念化と政治化である。少なくとも母語をめぐる言語状況と表現レベルから見ると、金達寿は「朝鮮人日本語文学」の終焉でありながら、「在日文学」の始原ともいえる。

日本の一部に、金史良から「在日文学」の始原を求める言説があるが、それは自己伝統の美化を図る政治的イデオロギーに過ぎないであろう。同様の言語的・文学的な理由なら、張赫宙からより始原を求めなければならないであろう。「在日文学」の誕生は、朝鮮語母語性の薄弱と日本語母語性の強化によってもたらされたもので、それは金達寿に始まる。言語の母語性の変化がもたらした現象なのである。言語の種類（日本語か朝鮮語か）ではない。作家個別のイデオロギーや政治思想で判断すべきでもない。張赫宙は戦後においても多くの日本語小説を書いているが、張の文学が「在日文学」でない理由は、こうした言語の母語性による。張はすでに絶滅した植民地期朝鮮人日本語文学の生き残りにすぎない。自らの「表現の未熟」を日本人読者に謝るなど（「黒い地帯」あとがき）、最後まで朝鮮語母語性から自由になることは出来なかった。本論とややずれるが、敢えて指摘しておく。

さて、筆者は、植民地期朝鮮人の日本語は「二重言語」と呼べるようなレベルに達していないと判断しているが、これはあくまでも作家の表現のレベルで、日常生活における日本語のレベルではない。断片的な生活言語や論文などと高度な文章言語（小説）の間には大きな落差がある。文章言語（小説）には果てしなく高いレベルの言語表現が要求されるのである。

筆者が、安易に「二重言語」云々という昨今の一部風潮に対して憂慮するのは、言語や歴史に対する理解が足りないからでもなく、生活言語と文章言語を勘違いしているからでもない。「二重言語」という概念が歴史認識の深刻な誤解をもたらすからである。要するに、植民地期には日本語の強要があり、多くの朝鮮人が日本語を母語のようにぺらぺらと話せ、朝鮮人作家が「二重言語」の

ような状態で、難なく日本語表現を行うことができたかのような、歴史認識の誤謬を前提するからである。同時代を経験した当事者が存在しなくなった今となっては、誤解による錯覚が神話のように定着していくだろう。こうした誤解は今後の歴史認識において重大な弊害をもたらし続けるであろう。

持説の繰り返しになるが、植民地期の36年間を通して、朝鮮の知識人はつねに日本語に不自由し、不自由な言語を要求される場面に立たされ、日本語の誤謬に悩まされ、日本語表現のもどかしさに不快な思いをしてきたが、表現手段（文学作品）としては誰一人ほぼ最後まで馴染めなかった。作家として耐え得るような「二重言語」を獲得した朝鮮人文学者は皆無に近かったと言ってよい。日本語力の個別的な優劣だけが存在している。作家における日本語の優劣は、「国語常用」を求める戦時期の様々な議論に影響し、それが思想の問題（近代と反近代）に連鎖していく。さらに戦後には、親日文学や抗日文学や民族文学等々の朝鮮半島の構造的な内部分裂をもたらす主因として定着していく。しかし、実態においては、誰一人も日本語の母語性を獲得した作家が存在していないまさにその理由で、植民地朝鮮人作家は民族的なのである。もっとも「親日文学」と言われる文学においてさえ、民族的な色彩が強い。語弊があるが、民族的に「親日文学」を書くのである。言い方を変えれば、民族的にしか「親日文学」が書けないのである。朝鮮語の母語性がもたらした現象である。それはほぼ宿命的である。

しかし一方で、日本語母語者である日本人はこの枠外に存在している。日本語はあくまでも宗主国の言語として存在し、日本人によって専有され、朝鮮人はいかなる場合においても日本語においては従属的な存在となる。いかなる差別やいかなる不平等より、言語（母語性）が乗り越えられない差別的根源として存在する。植民地支配の揺るぎない差別構造の根源がこの言語の母語性から発生しているのである。皇民化や内鮮一体の方向性も突き詰めれば、この母語性（日本語）の獲得になる。しかし、後天的な母語の獲得は不可能である。言い換えれば、内鮮一体や皇民化とは、当初から達成が不可能であるこうした言語的課題であり、この言語的課題によって、差別と不平等は揺るぎないものとなる。「強要し／強要され」ても達成できない、「奪う／奪われる」こともできないものとして、被支配者（朝鮮語母語話者）には無限の努力過程と努力目標だけが押し付けられる。これが植民地の根源的な支配構造であり、差別構造の核心なのである。

従って、植民地期における朝鮮人作家の日本語は、あくまでも「日本語」で

あり、朝鮮語はあくまでも「朝鮮語」である。「二重言語」などではない。

五　熊木勉訳と鄭人澤訳との比較

前節で長々と持説を述べたのは、それはこうした植民地の言語構造のなかで、朝鮮人として最高の日本語力を獲得したのが鄭人澤であったことを強調するためでもある。京城帝大出身の秀才であった兪鎭午や崔載瑞（李孝石・玄永燮を含めてもよい）、異彩を放つ天才詩人金鍾漢（日本の婦人雑誌記者、『国民文学』編集者）の日本語力がこれにやや匹敵するかもしれない。金史良もこれに劣らなかったと思っている。意外なことに日本留学や滞日を経験していない京城帝大出身者たちの日本語は概ね高いレベルで安定している。日本体験があり、日本語作品を多く書いた張赫宙と李石薫、金聖珉、金龍済はこれにだいぶ劣る。つまり、鄭人澤こそ植民地期に朝鮮人が達成した最高の日本語力の持ち主で、その鄭が李泰俊の短編集『福徳房』を翻訳しており、熊木訳はおのずと鄭人澤訳と比較され得る状況にある。鄭人澤訳『福徳房』の「跋」で張赫宙は、李泰俊の文学は「独特の文章美」から「とても翻訳され難い文学」とも指摘している。

おそらく熊木氏は、鄭の翻訳を綿密に検討し、それと対抗し得る、あるいは差異化できる独自の日本語訳を作り出そうと苦悶したであろう。熊木訳が鄭人澤訳を乗り越えたかどうか、これを単純に比較して判断するのは難しい。時代と境遇が違うからである。ここではひとまず、鄭人澤の日本語訳がいかなるもので、熊木訳の苦悩と特徴がどこにあるのかを示すため、少し例示して比較する。まず「福徳房」の冒頭である。

> ぱしやつと隣りの板塀の下で水を捨てる音がした。胸算用に餘念のなかった安初試（アンチョシ）（注釈省略）はその音にすつかり魂消て脚の折れた老眼鏡越しに、餌を見付けた鶏のやうな目つきで下水道を覗いた。白く濁つた米のとぎ水と一諸に色々なものが流れ出て来た。南瓜の皮、卵の殻、小豆の皮。
> 「ノクトビンヂヤトク（注釈省略）を焼いてゐるんぢやな、ふん」
> 五六年この方、宋初試は言葉尻に「ええ糞」だの「ふん」だのをつける癖がついてゐた。
> 「もう直ぐ芋名月ぢやな、ええ糞」（鄭人澤訳「福徳房」）

> ぱしゃん、前の家の板塀の下から水を捨てる音がした。指を折って計算

していた宋初試（注釈省略）はその音に驚いたのか、蔓の折れた老眼鏡ごしに、まるで餌をついばむ鶏のような目をして下水口に目をやる。白く濁った米のとぎ汁にいろいろなものが押し流されて来る。かぼちゃのへた、卵の殻、向いた緑豆の皮。

「緑豆ピンジャトック（注釈省略）を焼いとるんじゃな。ふん……」

五、六年ほど前から安初試はことばの尻に「くそっ」だの「ふん！」だのをつける癖があった。

「秋夕（注釈省略）ももうすぐか！くそっ……」（熊木勉訳「福徳房」）

日本人母語話者はどのように感じるのだろう。少なくとも筆者の感覚では、鄭人澤の日本語訳は朝鮮語原文の無駄な部分が切り落とされ、流れるような日本語で訳され、翻訳文である感じさえ与えない。朝鮮の民俗行事である「秋夕」も日本風に「芋名月」に置き替えられている。一方、熊木訳はハングル直訳で発生した無駄な部分が残存し、いかにも翻訳文である特徴を出している。おそらく宋初試の心理状態は「指を折って計算していた」（熊木）より、「胸算用に餘念のなかった」（鄭）であろうし、また「まるで餌をついばむ鶏のような目をして」（熊木）覗いたというより、「餌を見付けた鶏のやうな目つきで」（鄭）下水口を覗いたというほうが真に迫っているであろう。しかし、日本語的には熊木氏の「蔓のおれた」「とぎ汁」「南瓜のへた」が鄭の「脚の折れた」「とぎ水」「南瓜の皮」より正しいだろう。鄭の日本語にはまた鄭の限界があったのである。

朝鮮語の無駄な部分をどう処理するかは重要な問題で、最終的には訳者が選択することになるが、熊木氏は朝鮮語を原文通りに丁寧に逐語訳することで差異化を図ったように思われる。原文テキストを大きく変えて翻訳するには相当の勇気と自信がなければ踏み込めない。鄭訳の果敢な省略と整理は、鄭自身の日本語への勇気と自信の現れかもしれない。作家としての自己の力量を存分に発揮したい気持ちが垣間見られる。これほどの日本語を駆使する朝鮮人作家はおそらく鄭人澤しかいなかったであろう。別の作品を取り上げる。

「なんぼ振り返えつて見たつて始まらねえ、早よ追い風の中にとつとと歩くべえや…」

さう言ひながら妻を顧みる彼も、言葉だけはさり気なかつたが目にはもう一度涙がぢーんとにじんだ。（鄭人澤訳「桜は植ゑたが」）

「そんなに振り返ってどうする。追い風が吹いているうちにさっさと歩かないと……」
と言いながら妻を振り返る彼も、こともなげな口ぶりではあったが、目にはまた涙がにじんでいた。(熊木勉訳「桜は植えたが」)

貧困で故郷を離れる夫婦の姿を描いた冒頭の部分だが、鄭人澤の会話文はじつに見事である。故郷の村を何度も未練がましく振り返る妻に対し、夫の叱責の言葉としては「そんなに振り返ってどうする」(熊木)というより、「なんぼ振り返えつて見たつて始まらねえ」(鄭)というほうが相応しいであろう。故郷を追われる身として既に何度も泣いたであろうが、その状況は「また涙がにじんでいた」(熊木)と訳すより、「もう一度涙がぢーんとにじんだ」(鄭)という状況がより生々しく表現されているような気がする。鄭は会話文を、東北弁らしき言葉と朝鮮訛(関西弁・九州弁と標準語が混ざったようなもの)らしきものに訳しているが、熊木訳は標準語に近い印象がある。熊木訳では関西弁と標準語がおもに利用されているが、鄭人澤は東北弁と朝鮮訛と標準語などが使われているような印象である。戦前では朝鮮農民の言葉は一般的に東北弁で訳される傾向がある。創作においても同様である。

翻訳に際し、訛をどう処理するかはじつに難しい問題である。今日、朝鮮訛の日本語を知っている人はだれ一人おらず、その点、鄭訳は歴史的な意義さえあるようにも思える。こうしたことまで考慮すると、鄭訳のハードルは気が遠くなる。もう少し続ける。

身を切る風にも震えたがそれだけではなかつた。目路遥かに何処までも続いてゐる魂消るほど広い街道、その街道は彼等にとつて目にも不慣れであつたが、足にも心にも不慣れだからであつた。田や畑の畦道を歩いてゐる間はそれほどでもなかったが、いざ街道へ出て見ると本当に見知らぬ土地へ行くのだと、当てもなしに生きる途を求めて旅立つ不安がどつと押し寄せて来たからでもあつた。それでヒョウヒョウ唸る電線の音までが四十雀や雉の鳴声より恐ろしく不気味に聞えた。口に出してこそ言はなかつたが夫も妻も同じ気持であつた。(鄭人澤訳「桜は植ゑたが」)

震えが来たのは風が冷たいからでもあったが、それよりも何とも広く、目の届く限り延々と続く長い道、その道は彼らの目に見慣れないものであ

り、足にも心にも馴染めない道なのであった。田や畑のあぜを通るときにはそれほどでもなかったのだが、いざ大通りの新道に出ると、いよいよ見知らぬ地へと行くようで、生活のためにあてもなく旅立つ不安が胸を覆ってきたのである。ひょうひょうと鳴る電線の音も、頬白や雉の鳴き声よりひどく恐ろしく感じられた。口にこそ出しはしなかったが、夫も妻もそうであった。(熊木勉訳「桜は植えたが」)

鄭人澤訳のほうが簡潔で分かりやすく感じられる。農民が故郷を離れて「街道」(おそらく当時の「新作路」であろう)に出た衝撃が鄭訳では感覚的で分かりやすい。熊木訳は「大通りの新道」という情報がのちに示され、衝撃がだいぶ薄められている。故郷を追われた農民が抱く「当てもなしに生きる途を求めて旅立つ不安」(鄭)という表現は、「生活のためにあてもなく旅立つ不安」(熊木)より切迫感がある。「街道」に「生きる途」を掛ける鄭の感性は工夫されている。山村に住む農民が初めて直面する当時の街道(新作路)は「目の届く限り延々と続く長い道」(熊木)というより、「目路遥かに何処までも続いてゐる魂消るほど広い街道」(鄭)だったに違いない。農民にとって「街路」はまさに「魂消る」ものだったであろう。鄭の巧みな想像力が加味されている。鄭のこうした巧みな訳に、熊木氏はいかなる方法論で臨んだのだろうか。

鄭人澤訳と熊木氏訳を単純に比較するのは、言葉が先に占有された状態で、従前の訳となんらかの差異化を図らなければならない熊木氏にとっては極めて不利な状況で、公平とはいえないかもしれない。後出しジャンケンではなく、翻訳においては先出ジャンケンが圧倒的に有利なのである。しかし、鄭の翻訳には重大な問題点がある。

鄭訳には、今日ではあまり見られない現象であるが、本文の内容が大きく変えられ、削除されている。「桜は植えたが」の結末部分は、熊木訳『思想の月夜』の頁数で換算すると、24行ほどが削除され、それを補う3行が追加されている。作品の筋からすると、子供が死に、妻に逃げられた主人公の方書房が、桜が満開になる故郷を思い出し、飲み屋に入るが、そこで偶然にも酌婦になった妻と再会する。方書房はその場から逃げ出すが、妻は潔白を主張しながら方書房を追う。しかし、追い付けず、妻は地面に泣き崩れるところで作品は終わる。しかし、鄭訳では二人の再会の部分とそれ以下が訳されていない。夫婦の再会は行われず、方書房が酔いつぶれて世の中を嘆いて作品は終わる。なぜ鄭はこのような改変を行ったのだろうか。その原因は原作にあると思われる。

原典『桜は植ゑたが』での夫婦再会の場面は、筋からみると唐突の観があり、妻の潔白云々というのは全く意味不明である。筋の矛盾と破綻を来している。鄭はそれらの部分を削除し、筋の通る日本語作品に仕立て上げている。３行ほどの追加はそのためである。その結果、作品としては鄭の翻訳が李の原作より遥かに完成度の高いものとなり、朝鮮語の翻訳作品というより、最初から日本語で書かれた印象さえ受ける。題材と場所が朝鮮である必然性も薄くなる。ここまでくるともはや翻訳の域を超えているようにも思われる。

鄭人澤は優れた作家として、抜群の日本語感性をもつ翻訳家として、翻訳においてあえて削除と書き足しを行った。鄭の削除と追加で日本語訳「桜は植ゑたが」は原典を遥かに超える完成度を得たが、その行為には翻訳の是非と倫理性の問題が発生する。もちろん原作者の李泰俊の許諾を得て改変訳した可能性もありうる。日本語訳用に李が自作を書き直し、それを翻訳した一抹の可能性もあるが、その詳しい事情は明らかにされていない。おそらく自己の才にまかせて、翻訳文の完成度を高め、日本人読者に恥じない作品を提供するため、鄭が故意に改変を行った可能性が高い。ならば、これは翻訳として許されるのだろうか。

熊木氏が鄭の方法を取らなかったのはこうした憂慮もあったであろう。才に走らず、一語一語丁寧に訳し、注釈をつけ、訳文の自然さよりもひたすら正確な理解と伝達を図り、訳者の存在と個性を消したほうがよいと、熊木氏は判断したのかもしれない。日本語母語話者としての自然体の構えである。絢爛豪華な言葉で、才に満ちた工夫で、洗練された隙間のない日本語で、日本人読者を意識しなくてもよいという母語話者特有の自信と安心感が熊木氏にはある。それによっておのずと鄭訳と差異化される。鄭の日本語がいくら流麗であっても、坂口安吾におけるブルーノ・タウトのように、鄭は所詮、日本語母語話者ではないのである。真逆の論理を熊木氏に当てはめることも可能である。言語においてこの差はほぼ決定的である。乗り越えられない壁となる。

長編「思想の月夜」はこうした日本語母語話者の姿勢と方法論で訳されたものであり、それによって功を奏している。当時の朝鮮の風景が生き生きと蘇り、言葉と情景が透けてみえるような翻訳になっている。訳者が自己存在と個性を抑制し、ひたすら正確・丁寧に移し替えることによって、朝鮮という現場の臨場感（リアリティー）が醸し出されているのである。鄭訳のような焦りがない。それで訳文が原文より理解しやすいものになったであろう。そのおかげで、珍しくも、筆者はほぼ一夜で『思想の月夜』を読み終えることができた。ハング

ル原文なら途中で諦めたであろう。日本語訳を読み終えてはじめて、熊木氏の格闘の一端がいろいろ理解できた。同時に「朝鮮近代文学選集」刊行委員諸賢の悪戦苦闘の一端もおぼろげながら見え始めた。再度、完訳を願うばかりである。